

# とかす力 (八木重吉の詩を愛好する会会報)

事務局(連絡先) 〒277-0014 千葉県柏市東3-8-34 柏第一宣教バプテスト教会  
\*\*\*\*\*天利武人(教会牧師) 電話 04-7164-9159  
(会報編集、ホームページの連絡先) 〒270-1406 千葉県白井市中205 小林正継  
\*\*\*\*\* Eメール [kmat27aiko@gmail.com](mailto:kmat27aiko@gmail.com) 携帯電話 09061674553

☆ 第 29 号  
☆2023年(令和5年)  
10月10日 発行

## ★ 茶の花忌近づく

いよいよ10月26日の茶の花忌が近づいてきました。列席できる皆様との再会を楽しみにしています。

時: 2023年10月26日(木)

場所: 八木重吉生家(八木重吉記念館)

日程:

12:30 墓前礼拝(司式 牧野信次牧師)

中庭へ移動

13:00 八木重吉を偲ぶ会(敬称略)

司会 青木幸雄

13:00 茶の花忌準備委員長挨拶 八木幹夫

13:15 茶の花忌に寄せて 杉浦信男、荻部幹央、神林由貴子

13:40 詩の朗読 ちえの環

13:50 ギター弾き語り YO-EN (ヨ-エン)

14:10 重吉詩の身体表現 武蔵野美術大学学生

14:30 休憩

14:50 館長挨拶 八木明男

14:55 事務局より報告 小林正継

15:00 終了



## ★八木重吉の愛好者の紹介

前号で、書家の故高野俊峰さんを紹介しましたが、今回も続けて何人か紹介します。まず、合唱団の合唱曲に八木重吉の詩を取り上げて下さり、招待を受けて愛好会の数人で聞きに行ったことから、会とつながっている及川芳子さんです。「八木重吉との出会いとその詩の魅力」の原稿として寄せて下さったものをこの紙面でも紹介しておきます。及川さんは、横浜にお住まいで、新声会合唱団に属し、東京中心に活躍されています。

### 合唱曲で近づいた八木重吉の詩

及川芳子 (混声合唱団員・ピアニスト)

私の八木重吉の詩との出会いは、所属するアマチュア混声合唱団・新声会合唱団(東京)の主宰者で指揮者の柳川直則氏(御年九十一)※が作曲した混声合唱曲「夕焼」を歌ったことからです。

ゆう焼をあび 手をふり 手をふり 胸にはちさい夢をとぼし  
手をにぎりあわせてふりながら このゆうやけをあびていたいよ

皆さんはこの詩を心の中や朗読で読まれるでしょうが、私はこの合唱曲のメロディーに乗って読んでしまいます。歌った当初、「ちさい」という表現が特に印象深く、繊細でかわいらしくていいなあと思いました。柳川氏の指導の内容は・・・夕焼はどんな赤色か見えているか/「夕焼けをあび」は一息でもっていき/ふっている手には力がこもっているか/「ちさい」は両手でそっと包み込むような、ちさいよりもっとちさいかもしれない「ちさい」を歌いたい/「手をにぎりあわせて」いるのはきつと無心にぎゅつとにぎっているのでは/「このゆうやけを」では「この」をうんと指して/「あびていたいよ」は自分で本当にそう思って/等々…だった覚えがあります。

とても細かいですが、こういったイメージをうんと持って、広げて、詩の言葉を、クラシックの歌唱で、どん

な声でどんな技術で表現しようか…といった所が、勉強にもなり、難しさもあり、また面白さ、でありました。

柳川氏は1959年に「八木重吉の詩による五つの小品」と題した女声合唱曲を作曲しました。そして2017年、その混声合唱版を出版※、新声会合唱団が初演しました。その時私はピアノ伴奏を担当しました。

その中の詩は、

- ① 霧がふる (秋の瞳より)
- ② 木 (貧しき信徒より)
- ③ ちいさいふくろ (秋の瞳より)
- ④ 白い雲 (秋の瞳より)
- ⑤ 終曲 (寂寥三昧より) 　　です。



出版にあたり、柳川氏は次のように述べています。

「秋の瞳」「貧しき信徒」の二詩集を編んだだけで逝った八木重吉だったが、短詩とはいえ、二千篇余の草稿を残している。烈しい恋愛そして二人の子供への愛、詩作、信仰（聖書を唯一のよりどころとする厳しいキリスト教徒）に心を注ぎ、二十九歳の若さで此の世を去った。温かい平和な家庭と教師生活であったが、心の底にたまる孤独と悲しみは詩の奥から読み取ることが出来る。七十年余り私の座右の詩集の一つである八木重吉の詩から十数曲の作品の一つが、合唱曲集『秋』そして『夕焼』である。

この合唱曲の初演をきっかけに、合唱団で八木重吉記念館を訪問したり（後日出版譜やCDを寄贈させて頂いたり）しました。また町田で行われた展覧会にも有志で行き、八木重吉の生涯や様々な詩に触れました。愛好する会事務局の小林正継さんにも、新声会合唱団の演奏会にご来場頂き、この合唱曲を聴いていただきました。本当に感謝です。

私は中でも特に「白い雲」が好きです。

秋のいちじるしさは 空の碧をつんざいて 横にながれた白い雲だ  
なにをかたつてあるのか それはわからないが  
りんりと かなしい しづかな雲だ

秋がいちじるしい!! 空が真っ青なことを碧（みどり）というんだ! 雲がつんざく!! りんりと なのに、かなしい?...全てが私にとって新鮮で驚きの言葉づかいでした。重吉さんは秋が大好きで、秋の雲が大好き、というのが本当に私の中にインプットされてしまって、今でも秋になり青い空と雲を見ると重吉さんを思い出します。

音楽畑の人間で、文学的素養もなく、「詩の鑑賞・初心者マーク」の私が言うのも何ですが、重吉さんの詩は、余白が多く読みやすいです。余白、とは実際の紙面の余白、ひらがなが醸し出す優しい余白、自由に解釈できる心の余白、ちょっと別世界に行ける余白、忘れていた大切なことをふと思い出させてくれる余白...、とでも申しましょうか。そういうところに、魅力を感じております。

※柳川直則氏 昭和七年生 東京芸大音楽科卒  
一九五七年より新声会合唱団を主宰。電気通信大  
グリークラブ、東京大コーロソノ合唱団、東京  
女子大コールコンセンティオ、東工大シュワルベ  
ンコール、山脇短大、日本航空等で長年にわたり  
合唱指導者として活動。現在は新声会合唱団で活  
動中。合唱作品多数。

※混声合唱曲「八木重吉の詩による五つの小品  
・秋」は新声会合唱団より二〇一七年出版しました。  
(お問合せ・及川 (045-592-0512))



.....

次に、梶川泉一郎さんです。私にとって灯台下暗しと言えるすばらしい研究者です。実は八木重吉を愛好する会の活動に何回も参加して下さっていた地元柏の人で、柏市文芸部というグループの主要メンバーとして活躍していました。10年前ぐらいから会報も送っていました。八木重吉が1年余り生活し最高揚期の詩を書いていた千葉県柏市の地元民ですから、重吉の詩に映し出された柏の自然がまだ豊かに残っていた時代を肌身で知っています。柏の隣の詩に住む私も、葛飾の自然、広くは武蔵野の自然と言える木立や田園風景を幼少期から知っているので、重吉の詩を読んで良く理解できる喜びを感じていましたが、梶川さんは、自然をうたった重吉の詩1つ1つかも、柏のあの辺をうたっているのだと深い理解が出来ます。最近私が深く感じ始めていた、柏の自然をうたいながら、故郷相原の自然を重ねて歌っているのだという感覚を、梶川さんはすでに30年前に捉えて、相原周辺を足で散策していたのです。柏の愛好会が出来てすぐ詩碑「原っば」も建立されましたが、その頃から梶川さんは八木重吉の詩に興味を持ち、深く読み込み、愛好会10周年の頃に、柏と相原を重ねて詩を鑑賞研究し、文章にしています。柏市文芸部の機関誌『かしわ文学』に素晴らしい文章を書いています。現在、その書いたものを再度まとめる方向に向かっています。今回は、ほんの一部（平成12年筆）を、断片的に紹介しておきます。

.....

### 八木重吉の自然

梶川泉一郎

(中略)

八木重吉の実家を継ぎ、八木重吉記念館を長年守っている八木藤雄氏より「10月26日の〈茶の花忌〉に来て頂ければ少しはお話ができるかと思っておりますので是非皆さんで御出下さい。」との電話を9月の早朝に受けた。この機会を失うと何時行けるかといった思いも手伝い、是非とも参加させていただきます、と返答した。

八王子で横浜線に乗換え、相原駅で下車。そこから法政大学行きのバスで終点まで乗ってしまったが、本来ならば、大学経由の「大戸」行きもあるらしい。しかし、歩いて記念館までさほど時間がかからなかった。

あたりの景色を眺めながら歩いて行くと、重吉が幼い頃、ここの祭を楽しんだであろう「八雲神社」が途中にあった。祭典行事として今でも「大戸囃子」が伝承されているようだ。「笛、鉦、太鼓の5人囃子で、舞は獅子、白狐、ひょっとこ、おかめ、狸等々、曲に合わせて踊り演奏を盛り上げます。」との説明書きがあった。さぞかし祭の日は賑やかであったことだろう。この事は重吉詩にも歌われている。

故郷

心のくらい日に ふるさとは祭のようにあかるんでおもわれる (『貧しき信徒』)

祖父

紺がすりすりのおろしたてのを着て、お祖父さんのたもとをひっぱりながら  
やまの頂きに小さいお祭のあった ぬくい日に山路をのぼっていったっけ (「重吉詩稿」晩秋)

幼き頃の思い出は祭りの追憶とともに蘇るのだろう。また、祖父に可愛がられ、甘えていた様子が出ている詩である。後に御影から柏に転任することを決意した理由の一つに、病気になった祖父に何時でも会えることだった、ということもうなずける。そして実際、何度か見舞いがてら、ふるさとは訪れていたようだ。(談：八木藤雄氏) (中略)

思っていた以上に、「町田街道」は車の往来がはげしい。重吉の生家はこの街道に面してはいるが、少し小高くなった裏山にすっぽりと取り囲まれた格好で、少し奥まったところに位置している。裏山が北風をちょうどさえぎってくれるので、真冬でも暖かそうな感じがする。冬でも「ぬくい」陽だまりがある場所であり、「重吉詩」の重要な要素である「ひかり」があたり一面に揺らいでいそうな気がした。障子から射し込む晩秋のひかり。風と小枝に遊ぶひかり等、独特の感覚でとらえられた美しい光。それらの詩は、読むものの心さえ落ち着かせてくれる。

また、重吉がこよなく愛し、詩の題材としていた大きな「けやきの木」が敷地の両側にしっかりとあり、ものすごく有り難い気がし、思わず真下から見上げてしまった。

むさし野にはよくみたのだが この御影にはめったにみえず つまらなくてしかたなかった  
けやきの木がいっぽんゆう陽のなかにたつ こまかなこずえの そのこまかきのたまらないうれしさ  
(「重吉詩稿」貧しきものの歌)

(中略) 今回で二度目の相原行きである。(中略) 偶々手に入れた地元の「相原地域商業活性化の会」の人が作成した「玉のよこやま道まつり」の散策図を手がかりに、相原駅から重吉の生家まで歩いてみることにした。「玉」と言えばよく重吉詩にも出て来る言葉だが。

駅の西側から出発していくと、すぐに「観音山」入口の→が目に入ったので安心した。そのコースを登って行くと、左手側に雑木林があり、道沿いの斜面にはところどころに篠竹が生えているところがあった。重吉詩の題材ともなっているあの「しのだけ」だ。

しのだけ

この しのだけ ほそく のびた なぜ ほそい ほそいから わたしのむねが 痛い (『秋の瞳』)

(以下省略)、

【1 柏の原風景、2 ふるさと相原、3 大地の呼吸と静寂、3 部構成の中の、2 から抜粋】

.....

最後は、故吉澤英治さんです。最近までご存命でしたが、奥様から今年の3月25日に亡くなられていたとのたよりがありました。長野県佐久市で精薄児施設に勤務しながら「しんゆう」という手作りの月刊誌を発行し、自身の心の詩を載せ、また心の詩人たちとその詩も紹介していました。八木重吉と登美子夫人、吉野秀雄についてもしばしば掲載していました。登美子夫人との親しい関係でのエピソードの文章の一部をこの紙面で紹介します。

.....

### 思いは千里万里を走る

吉澤英治

平成3年6月23日は、NHK ラジオの〈特集ラジオ深夜便〉で「近代日本の求道者・八木重吉」の再放送があった。親交のある吉野登美子様のお名前を聞きたまらなくうれしかった。とろがである。アナウンサーの宇田川さんが、「吉野登美子様は、この放送後亡くられています」と言われた「ええー」跳び上がるほどの驚き。全身を走る戦慄。「NHKよ、天下のNHKよ、何という非礼か、よく確かめもせず、人の生死を公言するとは」身体の震えが止まらない、それもその筈、つい7日前、鎌倉にお住いの吉野様と電話でお話をさせて頂いたばかり。私は受話器を持ちダイヤル104でNHKの局番をたずね、早速ダイヤルを回したが、電話の受付は午前9時からとのテープ放送。緊急のニュースはこちらへの録音された声の番号へかけた。「何でしょうか」と言われ事情を話す。当直の方はすぐ連絡を取ろうとして下さったが、早朝なので放送局とは連絡がつかないまま、放送は終了。最後にまた「吉野登美子様は、この放送後亡くられています」と言われた。重い心のまま1日が過ぎる。吉野様はあの番組を聞かれたのだろうか。出演者という事でNHKから連絡が入ったのだろうか。もし聞かれたら、どんなにかお心を痛めておられるだろう。受話器の前に立ち、ためらい、明日電話をさせて頂こうと決める。翌朝のNHK番組での訂正は無かった。お昼になった。1時少し前に電話しようと思って、心の準備一つ一つ、時計を見ながら住所録を手にする。そこへ電話が入った。何気なく手にし「吉澤ですが」と告げると「もしもし、私、吉野登美子ですが、吉澤英治さまですか」と吉野様から電話。「えーっ」〈思いは千里万里を走る〉一瞬の閃。人として生まれた喜びに包まれた。(中略)「昨日、NHK ラジオでの八木重吉さんの放送きかせて頂きました」とお話しすると「ええ、なんでもその中で私がもう死んだとか言われたそうで」と吉野様。吉野様はすでにご存知であった。

(以下省略)

.....

### ★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

(募集) 題:「八木重吉との出会いとその詩の魅力」(この内容に沿うなら別のタイトルでもOKです。)

字数: 2000字程度(原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎)

締切: なし(随時お送りください)

送り先: メール ([kmat27aiko@gmail.com](mailto:kmat27aiko@gmail.com)へ) か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継 へ

### ★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> (更新が遅れていて申し訳ありません。)

Eメールアドレス [kmat27aiko@gmail.com](mailto:kmat27aiko@gmail.com) (管理者小林正継)

.....

\*最近、愛好者の方々が、実はそれぞれ素晴らしい研究や活動をされていた方だったのだと認識する事ばかりです。これからできるだけ紹介していこうと思っています。茶の花忌にも素晴らしい方々が集うので楽しみです。